嬉泉の新聞

・嬉泉の新聞／第35号／１９９７年（平成９年）４月発行（年３回発行）
・発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋１－30－９（〒156）
　　ＴＥＬ　03－3426－2323
・発行人＝石井哲夫　　・編集人＝友田　篤

福祉の転回の最中で

北沢清司

障害児教育を学び、知的な発達に障害のある人の福祉施設実践を皮切りに４ヵ所の施設と、中途、養護学校の教育実践と、研究所での経験を経て、大学での社会福祉専門教育に身を投じ、今日に至っています。かれこれ知的な発達に障害のある人に関わりを持つようになってから30数年を経てきたことになります。このような仕事をするようになってから恵まれた長男は、自分の専門とする知的な発達に障害のある子でした。それ故だけではないのですが、現場の経験の部分も含めて、障害者福祉論を講じているといっても、知的な発達に障害のある人の福祉にこだわっての16年間になります。そのこだわりの中、最近数年間の障害者福祉を巡る状況の変化は、今後の方向性を含めて目まぐるしさを感じると同時に、知的な発達に障害のある人を取り巻く関係業界の動きの鈍さに、代弁者を自認する者としての「囲い込んできた関係性」を感じざるをえません。

1993年の障害者基本法の制定、1995年の障害者プラン（ノーマライゼーション７か年戦略）の発表、そして1996年の厚生省大臣官房障害保健福祉部の発足等々と、大きく動きました。そのポイントは、「地域で共に生活する」にあります。そのような中、知的な発達に障害のある人を取り巻く状況は、地域生活を支える通所施設やグループホームの実践の広がりが都市部を軸に若干あるものの、1960年に制定された「精神薄弱者福祉法」における措置制度に裏付けられた入所施設体制に強く支配された「囲い込みの関係性」を維持・拡大することに汲々としているといえます。それは、独自の「高齢者精神薄弱者」施設の法体系への繰入を、の声として象徴的に表れています。今国会に上程されている介護保険制度は、その措置制度に高齢者福祉施設から風穴をあける性格にあろうかと思います。社会福祉施設数として最も多い保育所も、「利用」という観点での措置制度にメスを入れる児童福祉法改正が、今国会でされようとしています。そのような中で、障害者福祉施設の中で、その数が相対比較として飛び抜けている知的な発達に障害のある人の入所施設は、障害者基本法の実体法としての「障害者福祉法」制定への方向性の中で、どのようにその方向性を定めるのか、「囲い込みの関係性」をどう転回していくのか、等々、関係者の喉元に突き刺されかけている課題があるように感じるのは、私だけなのでしょうか。

障害のある人の地域生活をしていく上での「困難」に福祉サービスを、というところに段々と集約されつつある中で、その「困難」の共通性と独自性を明確にしていく作業、その福祉サービスに携わる人に要求される「専門性」と「倫理姿勢」の共通性と独自性を明確にしていく作業、福祉サービスを利用している人の周辺の家族を中心とする応援団の人に要求される本人との「関係性」の共通性と独自性を明確にしていく作業、等々、突き刺されている課題への糸口を見いだす努力をしなければ、と思う今日この頃です。

（大正大学人間学部教授）

施設と市民社会

このごろ社会福祉施設に対しての風あたりが強い。その理由としては、お金がかかる割に、その成果が上がらないということと、その施設だけでは、地域の福祉対策として不十分だということである。例えば、公立施設の中には、最高といわれる経費のかかる施設があるようであるが、それでいてそれなりの内容についてのよい評価が聞こえてこない。いくらお金をかけて人を多く配置してみてもよくなるものでないとしたら、この社会福祉施設というものを何と考えてみたらよいものであろうか。

お金のことは問題外というのではなく、お金をかければかけるほど良い仕事が出来るようなモデル施設を作ることも大切なのである。

私が嬉泉で仕事をしているときにいつもそのことを思っている。私の夢は、よい職員を集めて、地域社会では受け入れられない人たちをすべて受け入れることが出来る施設を作ることである。勿論施設にその人たちを閉じこめておくのではなく、治療教育を行って、社会参加を積極的にはからなければならない。

確かにこれは夢みたいなことである。今私は厚生省から、心身障害研究として、障害児者の治療教育という題で、研究をさせてもらっているが、どうも現実的に社会福祉施設では入所児者の社会参加をはかることが出来にくいということを感じてきている。今、我が国の社会福祉政策は、社会福祉施設の存続をはかりながらも、そこから地域福祉を盛んにさせたいという考えになっている。このことは、望んでいても無理なことであろう。金をかければよいわけでもなければ、自然に待ち望んでもよいとはいえないと言うならば何をしたらよいのか分からなくなってしまう。

私は、社会福祉施設を守り育てたい。しかも入所施設には入所施設の課題があり、通所施設には、通所施設の課題があって、これに対処していかなければならない。

入所施設はどうしてもよい職員が集まらないとだめになってしまう。言うまでもないことであるが、誰もが危機感を感じていないように思えてならない。資格制度にしても研修についてもなかなか制度化してこない。嬉泉独自の考えで実行してきても、地域の通所施設に持ち込めない。親は、できるだけ職員を張り付けにしたがるようであり、役所は、親の言うことをただす見識もないとなると困るのである。これには、施設側にも責任があり、積極的に主張するだけの見識を持たないのである。ともかくこのままでは入所施設の大部分が、その存在意義を失うことになるのではないかと思っている。

では、地域にある通所施設やグループホームがよいかというとそう簡単ではない。グループホームも通所施設も、地域にあることが家庭の延長というところに視点を当てて考えなければならない。これはごく当たり前のことであるが、家庭の定義が曖昧であって、これが単に親がいて、家庭を形成しているなどと簡単に考えられない。家庭は社会生活の単位であって、この市民社会構成という事象に関して、多くの市民の識見が流入しやすい状態にあることが重要という観点を強調しておきたい。つまり常に多くの援助や介入の眼から検討されている状況であって、その行き違いや、誤解に対して、家庭内にそれらに対応していく上での考えや秩序を作り上げているという日常的な作用があるということなのである。

社会福祉施設の閉息した状況は、このような市民社会からの乖離によって作られたという事を改めて考えてみることが大切だと思うのである。

施設経営の創造性（その二十六）

石井哲夫

社会福祉施設としての専門性を評価して、それが地域社会にも貢献できるという考えである。しかし今の社会福祉施設は「人喰い虫」としか言いようがない。だから地域の福祉は、施設ではなく地域の人の力を借りて進めざるを得ないという考えが強まってきている。ただ今時の地域には、昔のような人情があるはずはないし、自然に盛り上がってくる福祉の心を待ち

私たちのしごと

須藤福祉センター各事業所からの報告

三十年を振り返って

奥村幸子

あの頃から、もう三十年も経ったのかと思う。目の前と先のことしか見ないで過ごしてきたなあと思うのは、この頃ふと、この年月で得たものと失ったものを数えかけていることに気づくからだろう。得たものは経済的な豊かさで、失ったものは自由、作られたものは組織で壊れかけているのは人間関係といったら言い過ぎだろうか。この年月私たちが、この仕事に注ぎこんだ途方もないエネルギーと応援して下さったたくさんの方々に対する冒涜ではないかと恐れる気持ちを感じながら、このような思いが浮かんできてしまう。決して単純に「昔はよかった」と言っているのではない。若い頃は、可能性に満ちていて、一つ一つを選択していくごとに未来は確定され、選択肢は少なくなっていくということが、個人としても仕事（組織）としても同じなのだなということ、もう一つは、まっしぐらに豊かになってきて現在を迎えた日本のあゆみと歩調を合わせるように、私たちの仕事も新しい時代を迎えようとしていることなどを思ってしまうのである。

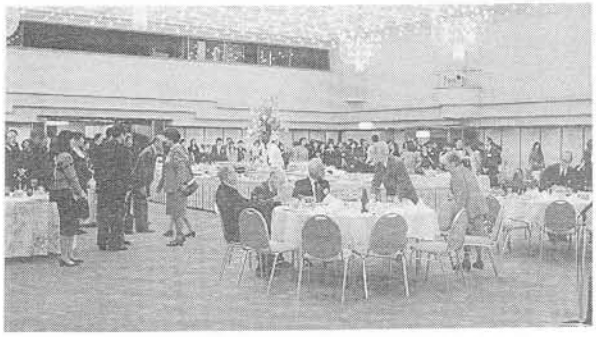
「石井先生、かくれんぼしましょ」と職員室に迎えにきた「すこやか学園」の子どもたちといそいそと庭へ出て行った石井先生。嬉泉ができる前から私たちのものだった南伊豆子どもキャンプまで足を運んで下さった先代理事長が、「こんな辺鄙なところで……」という言葉を飲み込んで、「箪笥でも買いなさい」と下さった一万円札二枚。「随分きちんとできるようになりましたね」と不備だらけの監査資料を見て、まず労って下さった当時の東京都福祉局指導室の小倉さんの笑顔。心に焼き付いているこのようなシーンを持っているということは、若い時、若い仕事に携わったものの特権なのかもしれない。

これからの嬉泉を考える時、私たちの時代とは違った意味での大きな困難が見える。かつてに比べて夢のように豊かになったとは言え、現在の状況の中で見ると決して十分ではない。でも、私たちから見ると、質が違ってきたように思える人間関係の在り方のなかにも、新しい絆が生まれてきているように思う。

日本の福祉がやっと国民皆のものになる方向を向きかけている今、嬉泉の創設期と同じように、新しい仕事の夢が描ける時代になったとも言えるのではないだろうか。創立六十周年を迎える時、今を第二期の初めとして「よい仕事をした」と言えるような「充実感を味わえる職員」が一人でも多くいてほしい。

三十年は、短いようだがやはり長い年月なのだと思う。あんなに嬉しかった「子どもの生活研究所」の新築の建物が、ボロボロになって改築を迎え、袖ヶ浦の桜の若木が立派な桜並木を作っている。この年月、私たちによい仕事をさせて下さったすべての方々にお礼を申し上げるとともに、これからもお見守り下さるよう心からお願い申し上げたい。

（めばえ学園園長）



法人設立30周年記念祝賀会

職員の思い

今思っていること

一尾　弘志

「地域福祉」ということが言われるようになって久しいが、その機運はますます高まってきています。袖ヶ浦でも今までの地域活動に加えて、平成七年度から地域推進事業室を設けて、施設と地域を結ぶ「ひかりのファーム・フォート」「地域療育相談事業」等、新たな活動を試みています。私も推進室の一員として、曲がりなりにも、フォートの管理人や療育相談などに関わっていますが、何しろ力不足で四苦八苦しているのが現状です。

ふと思えば、両親に迷惑をかけてきた私が、家族をサポートする組織に就き、近所づきあいも稀薄であった私が、地域福祉を目指した仕事をしている…まったく、他人ごとのようで苦笑せざるを得ません。

やめようと思えばいつでもやめられる、私は今までそうした生活を送ってきました。しかし、こうしてここにとどまっているのはなぜか？やはり、誰かの何かの役に立ちたいのです。それは正直な気持ちだと思います。

私が生まれ育った地域を離れて、もうすぐ十年になろうとしますが、つくづく時を無駄にしているなぁと感じます。新しく生活を始めた地域で、もうすぐ一年を迎えます。正直な気持ちが萎えてしまいそうな時、叱咤激励してくれる人達がいることに感謝しています。

私も「機運」を高めなければ…と思っています。

（子どもの生活研究所）

理想の仕事

山下　華

二十一才の秋、私は、幼稚園の先生を目指して就職活動をしていました。児童学を学び、小学校と幼稚園の先生の実習をしてみて、より個々の子どもの個性や可能性を大切にした関わりを仕事としたくて幼稚園を選びました。ところが、最初に希望した二園を立て続けに失敗し、すっかり自信喪失。そんな時に、ゼミの先生よりここ嬉泉を紹介され、早速、実習をしてみました。そこで、個々の子どもの特徴に合せ丁寧に援助する実践をみて、『ここだ。望んだ仕事と巡り合う為に前の失敗はあったのだ。』と思えました。

一年目のこぐま学園では、多くのスーパーバイザーのもと、個別指導を経験し、学生時代に学び志した丁寧に子どもの個性や能力をみて可能性を伸ばす理想の援助を学びました。その頃、多くの学友たちは、服が汚れるからという理由で砂場に水を持ち込んではいけなかったり、園児獲得のため子どもの発達レベルに合わない見栄え重視の活動や作品づくりをこなさなければならないなど、大学で学んだ理想と現実のギャップに悩み、妥協を余儀なくされていた中、私は幸せなスタートを切りました。

二年目のめばえ学園では、厳しく温かい指導のもと、仕事をする上での自分をみつめ直し、努力して問題点を乗り越える姿勢を学びました。生まれてから、こんなにも密に自分のために関わってもらったことは初めてのように思います。時には辛かったけれど本当に充実した一年でした。

そして三年目で赤塚福祉園に移り、今、四年目。ここは、区立民営の施設で、嬉泉の理想的な実践がなかなか理解されず苦労している現場。私も、学友達の苦労に似た体験をすることになりました。けれど、私は、二年もの間、信頼できる価値観のもと、恵まれた環境で実践を学んだ上、心強いスーパーバイザーと仲間と共に仕事ができ、やはり恵まれていると感じます。人を育てる為に欠く事のできないプロセスを一般社会に理解してもらうことは思った以上に困難ですが、丁寧に教育していただいたことを大切に、精一杯頑張っていきたいと思います。

（赤塚福祉園）

アトランタ・パラリンピックに参加して

廣田博子

平成八年八月一五日から二五日の十日間、アメリカのアトランタでのオリンピックに引き続き、パラリンピックが開催されました。そのパラリンピックも今年で十回目を迎え、日本からは選手団一二三名が参加し、私は陸上競技のコーチとして参加いたしました。

パラリンピックは当初病院の治療スポーツとして始められ、現在では大きく成長し、競技性を指向した、世界的規模の大会となりました。

今回のパラリンピックは日本で開かれる競技会に比べると、あまりスムーズな大会運営ではありませんでした。特に食事の面では日本人には少々しつこい味で、選手が早々に音を上げてしまいました。そこで食事の改善策として、自分達でおにぎりを作ることにしました。

まずお米を手に入れるのに意外と苦労したのですが、電気釜は後から応援にくる選手の家族に買ってきていただいて、なんとかやりくりをしました。

大会はナイターで行われることもあり、選手が選手村に帰ってくるのが夜の十一時近くになり、それからコーチの打ち合わせを行い、午前〇時を過ぎてから食事の準備に取りかかって、朝は五時には選手が起きてくるという、忙しい十日間でした。

普段はあまり主婦業をしない私が食事の準備をすることに、選手は少々不安に思っていたようですが、大会の後半には「お母さん、僕はどれを食べていいの？」と、二十名の陸上選手全員が、食事を通して私との関わりを持つことになり、違った角度から選手を見ることができました。

やはり、生活態度がきちんとしている人、コーチの話を素直に聞ける人、そして協調性が保てる人が、自己の記録を大幅に破り、入賞に繋がっています。メダルが取れる力があるにも関わらず、メダルはおろかこれでは入賞すらできないのでは、ということが競技を行う前から懸念されるという、炊事班担当コーチ（お母さん）としてひとつ違った角度から選手を見ることで、肌で感じることができました。これはとてもよい経験になりました。このことを通して、やはりやることをきちんとやらなければだめだということを、再確認できたように思います。

日本の成績は金メダル一四個、銀メダル一〇個、銅メダル一三個の合計三七個のメダルを獲得しました。そのうち私がコーチを勤めた陸上競技では、金メダル五個、銀メダル五個、銅メダル二個の合計一二個という成績でした。

開会式の日本選手団

ところが、帰国して驚いたことは、ほとんどのテレビや新聞に報道されていないという事実でした。これには少々憤りを感じました。あの有森さんと同じマラソンコースを車椅子で走り、金メダルを取った選手がいるというのに、どうして報道評価に、あれ程の差がでてしまっているのか、涙ぐまざるを得ません。国連が国際障害者年の標語として、「完全参加と平等」を掲げたことからしても、パラリンピックの報道の在り方を通して、福祉や障害者についてもう一度考え直す機会が提供されたのではないか、と思われるのです。

最後に、私は、二五年間、障害者スポーツのボランティア活動を生き甲斐として行っております。今回のパラリンピックに三週間もの長い期間参加できましたのは、私の勤務する赤塚福祉園を初め、社会福祉法人嬉泉の皆様方の深いご理解とご協力の賜物と、改めて感謝し、御礼申し上げます。いずれ赤塚福祉園からも選手が生まれてくれれば、と願いつつ締めくくりたいと思います。

（赤塚福祉園）

嬉泉の出来事

マレーシア・ツアー

あゆみ組の市川浩志さんの旅行好きは有名だが、その旅行が、みごとな旅行哲学によって計画されていることを知っている人は数少ないと思います。

彼の旅行哲学のひとつは「南端」です。それは同時に終点を意味し、それから先は何もないところとなるわけです。次に「海」と「田舎」であり、移動は基本的には「鉄道」で、寝台車は必要十分条件です。

田舎の条件も「山、川、畑、田んぼがあり、人が少なく静かでなければならない」となっています。

今回、これらの旅行哲学をもとに、三年前の台湾旅行に続き二度目の海外旅行に行きました。目的はアジア大陸の最南端「シンガポール」です。彼の考えた旅程は、タイのバンコックから、マレー鉄道でマレー半島を三七時間かけて縦断しシンガポールに行き、シンガポールの地下鉄を全線（約五時間）乗り継ぎ、東西の終点がどんな田舎であるか観る。また、マラッカ海峡に浮かぶ島、「東洋の真珠」と呼ばれるペナン島で泳ぐという夢あふれる十日間の旅でした。

石井所長とはシンガポールで合流することになっていたので、ここまでは、彼とサポート隊である私と一尾さんの三人だけでした。タイ語も英語も出来ない我々にとって、頼りになるのはマレー鉄道に詳しいベテランの現地ガイドのスポンさんのはずでした。飛行場でやっと会えた時から嫌な予感がしたのですが、彼がマレー鉄道に乗ったことがないと聞かされた時には開いた口がふさがらず彼を見つめてしまいました。

開き直りの旅が始まりました。車両も寝台も予想よりは良かったことや、運よく日本人の親子連れと一緒になれたことが幸いして、鉄道で国境を越えるというロマンあふれる旅は、サポーター二人が水に負け深夜に奇妙なトイレに幾度も通い続けたことと、彼も食べなかったまずい車内食を除けば、満足いくものでありました。

シンガポール以降も、彼の旅行哲学は徹して実行されました。特にペナン島では、他の人達が泳いでいる間、島の西端プラウベトンまでタクシーで行ってきました。ホテルの人は何もないところだと、この計画を「クレイジー」とまで言ったのが（すぐにユニークと訂正した）、途中の果物の木や猿や鳥に歓迎され、ペナンの田舎を満喫できたことは、一般的な観光とは違う味わいのある観光ができたと、私は彼に感謝しています。

今回の旅で、彼がベストワンにあげたのもペナン島です。ペナン島には元厚生省専門官の中沢先生が、この島に施設を建設するべく働いておられ、大変お世話になりました。いつの日か、中沢先生の施設の利用者の方を日本に、嬉泉の利用者の方をペナン島にと、交流が図れればどんなに素晴らしいことかと、帰国後にバンコクの寺院やペナン島の原住民の彫刻からイメージを受け、陶芸の作品作りを楽しげにやっている彼を見て思いました。現在、彼は次の台湾旅行を計画しながら一生懸命働いています。

（戸屋　隆）

赤塚福祉園祭り

赤塚福祉園祭りというのは、子どもの生活研究所の嬉泉バザー、袖ヶ浦のびろ・ひかりの学園の嬉泉祭りバザーに匹敵する、年に一度の赤塚福祉園主催のお祭りです。その内容は、福祉園利用者や保護者の方々、地域住民の方による作品の展示・販売と、職員・利用者による模擬店やゲームコーナー、ビンゴや福引きといったアトラクションなどで、地域の方たちや関係各方面の様々なお客さんをご招待して開催してきています。私は、この赤塚福祉園祭りを行事係として三年間携わってきましたが、年々、訪れる方が増え、賑やかになってきているように思います。

今回は食料品を扱うにあたって、O－一五七の問題があり、衛生面で大変厳しく気を使い苦労しましたが、特に問題もなく無事に終えることができ本当に安心しています。展示・販売コーナーでは、利用者と職員が一生懸命、長い時間をかけて苦労して準備したかいあって、陶芸・機織り作品、和紙工芸等、素晴らしいものが出来上がりました。さらに、地域の方々が、カラフルな飾りをあしらった帽子の作品展示やお手玉作りの実演講

習をしてくださり、また、保護者の方々からも作品を多数展示していただいて展示・販売コーナーが一層ひき立ったように思います。

アトラクションでは、赤塚第一中学校のブラスバンド部の皆さんにオープニングセレモニーで演奏していただきました。利用者の人たちは、ブラスバンドの生演奏の迫力に圧倒されてもいましたが、音楽のリズムに合わせて体を動かしたりして楽しんでもいたように見えました。そして演奏が終わると、会場からアンコールの声が一斉にあがるほどでした。

またお祭りに来ていただいた皆さんに、より楽しんでいただこうと思い、大きなサイコロを使った豪華景品があたるビンゴゲームを行いました。地域の方々から利用者、父兄の方、職員とお祭りに参加した全員が、賑やかに楽しい一時を過ごしました。

このように、多くの方々からのご協力が得られ、今回の赤塚福祉園祭りは大成功を納めることができました。地域の方々をはじめ、保護者の皆様には、本当に感謝しています。

利用者も、自分の作品が販売されお客さんに買っていただくことによって、作品を作ることに対する意欲がわき、次回に向けてさらによい作品を作りたい、作ろうと今から張り切っています。また、私たちも、今年度の赤塚福祉園祭りが、地域の方々や利用者、保護者の方々にとって、さらに充実したものになるよう、頑張っていきたいと思います。（坂田　朗）

投稿

私が思うこと……

有田　憲一郎

私は、実家から徒歩で十数分の所にある『板橋区立赤塚福祉園』に平成五年度より一年二ヶ月間通所いたしまして、その間、嬉泉の職員の方には大変お世話になりました。

現在私は、宮城県仙台市にあります重度障害者・難病ホスピス型療護施設『太白ありのまま舎』という所で生活しています。

この『太白ありのまま舎』は、療護施設という形ですが、個々に自立心を持って毎日の生活を送っています。ですから、施設側で組み立てられた日課に沿って生活するのではなく、個々にあったプログラムを自分で組み立てて生活する場所です。もっと分かりやすく書くと、皆さんが日曜祭日に「何をしよう。」・「どこか行こうか。」・「仕事の残りでもやるか。」などと考えて行動するような感じでしょうか。

「何で東京から仙台に行ったか。」というと、当時赤塚福祉園の白石さんから「ありのまま記録大賞という原稿募集があるけど、挑戦してみたら。」と誘われ、原稿用紙で約八十枚を書いて応募しました。その結果は落選に終わってしまいましたが、数か月後『重度障害者・難病ホスピス型療護施設！入居しませんか。』といった案内が届きました。勿論、私も両親も驚き電話で話や資料を見ているうちに魅力を感じてきました。

我々日常生活において介助を必要とする障害者にとって、今まで必死で面倒を見てくれていた親や兄弟などが倒れたり、亡くなったりした場合に当事者がどういう人間らしい生き方をしていけばいいのか…と、両親ともども年をとっていくうちに重要な避けて通れない問題が深刻化してきます。

私は、高校一年生の時から十年間、全肢連（全国肢体不自由児者父母の会の略）の研修大会に参加しています。この研修で自分自身の考え方が大きく成長したのは確実です。その中で、毎年問題になっていていろんな方から耳にタコができる程聞かされてきました。そして、そのことを自分で真剣に考えてきた結果が今の生活です。

よく、お母様方が、「うちの子は私がいないと…。」とか「私が元気なうちは面倒見続けるわ。」などと考えておられることを耳にします。確かに、親心といいましょうか、家族の絆とか「子供と長い時間過ごしていたい。」という思いも強いと思います。ですけど、果たしてそれを永遠に続けていいのでしょうか。私の考え方として、親が元気で「まだまだ面倒見れる。」という時に親離れ・子離れについて真剣に考え自分(障害者本人)にあった精神的な自立ということを考え少しずつ準備をしていくことが大切だと思っています。そして親が元気なうちに自分に合った充実して安心して生活していける手段を確保できれば最高だと思います。

そのためには、自分で考えたり家族の中で話し合ったり、あるいは職場の方や周囲の方が相談相手になって、面倒くさがらず少しずつ真剣に話し合う時間を持つことだと思います。

（太白ありのまま舎）

ひかりのタイムス

独立第29号

タイ・マレーシア・シンガポール旅行記

市川　浩志

家から出て、成田空港で集合してバンコクへ行った。ついた日は休み。次の日は寺巡りをして陶芸の参考になる物を見てその日は休み。

次の日はバンコクから、列車でバターワースへ行く。その列車は寝台で夜は横になった。タイにも田舎はあった。

バターワースへついて下車して港を見た。それからクアランプールへ行った。景色はヤシ林があった。クアランプールからは寝た。

列車の旅は楽しかった。シンガポールについて1日休み。

地下鉄で郊外に出て1日車。2日目は西に行った。林があった。北回りしてもホテルに戻った。それも楽しかった。

シンガポールからペナン島へ飛んだ。ペナンに2泊した。海で先生達と泳いだ。

マラッカ海峡は水はあったかかった。それからタクシーで田舎へ行った。そこからクアランプールへ行って、その日に休んで次は市内観光した。

クアランプールを夜出て、成田空港へは朝ついた。

楽しかったのはマレー鉄道に乗った事。地下鉄に乗った。そのマレー鉄道の景色が良かった。シンガポールの郊外が良かった。

それでペナンで海辺で泳いだのが、楽しかった。それでタクシーで田舎へ行ったのが良かった。

次は台湾に行きたいと思っています。それと韓国も行きたいと思っています。今は九州に行きたい。

（袖ヶ浦ひかりの学園利用者）

マレーシア・シンガポール旅行

飯田　真奈子

今年の八月下旬に、私は、生まれて初めて、シンガポールと、マレーシアへ行きました。五泊六日の長い旅行でした。市川君も一緒に行きました。先生は、石井先生、奥村先生、そしてつづきの家の、多規子先生が一緒でした。心強かったです。

小さい時から、常夏の国へ行きたいと、思い続けていました。それが、念願がかなったのでした。

シンガポールと、マレーシアは、日本の夏と、同じ位の暑さでした。ただ、日差しは、赤道に近いだけあって、日本より、かなり強かったです。

シンガポールの町中は、東京と違い、道路がとてもきれいで、ごみ一つ落ちていませんでした。

二階立てバスが走り、ロンドンの町中を思わせました。道路はしには、ヤシの木が並び、南国に来た実感を、身にしみて感じました。

シンガポールに泊まった後、今度は、マレーシアの離れ島の、ペナン島へ行きました。

今回の旅行で、何といっても、ペナン島での事が最高でした。

ホテルの目の前には、海があり、私達が泊まったホテルは、プールは、とてもしゃれた形をしていました。橋がかかり、泳ぎながら橋をくぐったりする、本当に面白い物でした。学園のプールでは味わえない楽しさでした。

海は、くらげが出るとの事で、一部の部分でしか泳げませんでした。海岸沿いには、立派なヤシの木があり、どこででも、日光浴が出来る様に、ビーチベッドが沢山置かれていました。ヤシの木は、台湾で見た物より、見事でした。

日本の海水浴場と違い、ゆったりしていました。ペナン島には、一泊しました。二日目の真ん中の日は、一日プールで泳いだり、海の、遊泳出来る所で泳いだりして、一日泳ぐ事で楽しみました。

（つづく）